
Silent voice -声なき声-

Felicitas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i l e n t v o i c e - 声なき声 -

【NZード】

N 9 8 5 6 W

【作者名】

F e l i c i t a s

【あらすじ】

一人の青年の学園生活を描いた、青春&オカルト物語。

「なんで解つてくれないんだッ！」

家の外にまで響きそうな声で叫ぶ、若い男の声。

「当然だらう、そのような不養成な学校なんぞ、私は認めん
重く、威厳というものがそのまま乗つかつてているかのよつた声で
意義する、別の男。

「もう編入が決まつちまつたんだし、お願ひだよ！」

すすり泣くかのように儂く、弱く、しかし根氣は根強い声を張り
上げる。

「編入してしまつたんなら転校すればいいだけの話だ。転校先の学
校には既に連絡してある」

海面付近の小魚を丸呑みする鯨のように、重い声は若い男の声を
飲み込む。だが、そこから脱出する小坂もまた必死に抗う。

「なんで一々親父が口出してくれるんだよ！俺の問題だ！俺がど
うにかする！」

「ふん、所詮出来ることは限られているし、意味がない。私はお前
の身を案じているんだ」

この男たちの競い合ひは、日常茶飯事ともいえる程の熱氣を炊き
上げる。

「だ、だつたら！三ヶ月……いや、二ヶ月！二ヶ月だけでいい
から行かせてくれ！それで何も出来なかつたら、親父の言つとお
りにする！なんでも言つことを聞く！」

執行猶予を主張し、一先ず安定期をつかみ取つとする若者。

「……分かつた、二ヶ月だな。その間に行動し、成果を上げろ。さ
もなくば、解つていいな？」

若者の意図を理解したのか、下手に出る重い声。

「分かつてる」

ふん、といつ言葉を残し電話が切れる。通話時間は5分足らず。

この5分は想像以上に短く感じ、あつという間であった。

通話の切れた後も若い男は受話器を握りしめ、握力でひびが入る音が部屋にこだまする。沈黙はより一層深まり家の外のバイクの音が聞こえる程。

「……やらなくちゃいけないんだ」

その小声は、誰に向けられたものでもない。自分に言い負かした。

桜の花は決まって春に咲くわけではない、というのがこの学校の常識。時には6月の終わり、梅雨時に咲き、雨のテンポに花弁の舞が調和して清らかなソロを奏で、人間の憂鬱な心を魅了する。また時には冬に咲き、雪と花弁の奏でるデュエットは見る者に癒しを与える。しかし人間の傲慢な心は溶かすことはできない。それが、人間の理屈。この怪談を含む、この学校の14怪談は学校内だけなく周辺一帯の町や都市でも有名であり、そこに通う学生は、学校の名前を取つて『魔亞羅の信者』と呼ばれている。実際にはそんな宗教なぞ存在せず、魔亞羅高校の評判は下がるばかりである。しかし稀に、14怪談教書第1章第3節に「かの地に咲く桜は魅了する者の心を喰らい支配されたり。」とつづられている通り、何故か桜の花が咲いている内は学校内での恋愛関係の告白率が3・2%増加するらしい。また第3章2節には「かの地に来る忌まわしき者には災いと憎悪が根を張り心が妖へと出る」とある。ここにある『忌まわしき者』とは『日本人では無い者』という意味である。もしも、この教書の存在を知る者がいれば、『忌まわしき者』はかの地に訪れるることは無かつた。

* · · · * · · · * · · · * · · · * · · · * · · · * · · ·

時は4月の終わりの日。編入としては1ヶ月ほど遅かつたと思われるかもしれないがしそうがない。3人家族で、父親の単身赴任中に母親が急に病死してしまったのだから。そのため、いろいろな手続き等があり、入学が1ヶ月ほど遅れてしまった。学校側の配慮で入学後の欠席は欠席日数に組まないという案があつたのだが、父親の希望により入学 자체を遅延した。自分の子供のことを思ったのだ

ろうかは分からぬ。だが、子供にとっては苦痛以外の何物でもなかつた。本来入学後の欠席であるとすれば、クラスメイトたちに自分の存在が伝わつてゐるはずである。その状態で顔を出せば、気遣い、手厚く迎い入れるはずである。しかし入学遅延、即ち編入であれば別だ。クラスメイト達は自分のことを知らないのである。その状態で教室に入れば、好奇な視線を全身に万遍なく晒されることになるだろう。

「はあ……」

ため息交じりに息を吐く、と生氣が一緒に失われそうになり足が止まりかねない。

「……いやいや！　ダメだこんななんじや！」

頬を叩き、氣合を入れる。編入初日にこんな憂鬱な氣分になつてどうする！

学校の門をくぐり、職員室へ直行。その間約2分。意外に大きい校舎なので迷いかねない。昇降口で棟内地図を確認し、職員室へ向かう。さつきまでは憂鬱つぽい感じだったが、校舎内に入つてしまふと意外と落ち着く。なんだろうこの感覚は。

ドアを2回ノックし開く。と、ちょうど職員会議中だつたのか教員たちが皆立ち上がつてゐた。室内は教室2つ分ぐらいの大きさ。

「……お？　あ、君は……はやし嵐岸君？」

一番前の、教頭？　ネームプレートにそう書いてある机の後ろに立つていた教員が俺に気付いて名指しすると、全ての教員が俺に振り向く。ヤバい、物凄い恥ずかしい。

「あ、はい。嵐岸 隼はやしです。」

ぎこちなく挨拶して、そのまま硬直。緊張しまくつてゐる。教頭らしき人は俺に歩み寄つてきながら話す。

「校長から話は聞いてるよ、『愁傷様。えつと嵐岸君の担任は……他の教員たちに向き直り、顔を右往左往する教頭。その頭でそんなことするとヅラがとれるんじや……』

「あ、私です」

女性の中でも一番背の高い、教頭の席の向かいの席にいた教員が肘を折つて手を上げる。てか目の前のじゃねえか、覚えとけよ。

「ああ、そうそう、あの先生。逸水先生ね」

逸水先生とやらも駆け寄つてきて、

「逸水です、よろしく。あなたのお父さんもこの生徒であり先生だったのよ、1年間だけだったけど。私にとつて憧れの先生だったなあ」とあいさつされた。

え、あんなウザいのが？ しかもこのO.B.? ジャなんで俺をここに来させたくなかったんだ？

「え、えっと、それじゃ職員会議を終わります、お疲れ様でした」教頭はそういうと、速足で職員室を出て行つてしまつた。職員室がざわめき始める。

「父つてどんな先生でした？」

思わず逸水先生に聞いてしまつ。

「どんな……どんな？ エット……威圧感つていうか……そう！ しつかりしたとこ！」

しつかりしない先生がいるのかよ！ あ、アンタか。なんか抜けてる感じがするよな、確かに。

「実はね、私嵐岸先生に告白したことがあるの」

「ええ！？ いやいや、そん時もう俺生まれでましたからね！-?」
多分。

「10年前だから……うん、そうね」

「いや『さうね』じゃなくて！ 結婚してるので知らなかつたんですけどー？」

「知らないわよそんなの。見た目が若くて、大学卒業後すぐに来たのかと思つちゃつたから」

「それでも最低6歳離れてますよね……」
頭痛がしてきた……

「愛に年齢なんて関係ないのよー」

「そうですか」

頭痛が酷くなつていいく…… もしかして親父、この先生がいるからここに行くなつて言つたんじゃ……

「実は30歳超えてて妻子持ちなんて、その時は知らなかつたもの……」

「結局10歳以上離れてますよね」

しばらく先生と漫才（？）をやつていると、予鈴が鳴る。

「じゃあ教室に案内するわ。緊張しないでね」

片田でバツチリウインクすると、ハートが跳ねかけた。2重の意味で。

職員室を出て左折。事務棟から教室棟へ。流石に予鈴が鳴つたらには廊下には誰もいないだらうと思つていたが、結構いる。逸水先生が「ほら教室へ入りなさい」と言つと男子は素直に入り、女子は先生を睨み付けて入つていいく。女子には評判が悪いみたいだな、そらそつか。顔と性格の所為だらう。2階へと上がり廊下を進み、1年A組の前で止まる。

「私は行くから、ちょっと待つてね。呼んだら入つてきて」

「またもやウインク。俺には年上属性はないですよ、はははは。ふう。

廊下にいても教室内の声が聞こえる。「おはようございます」先生の声だな。「実は、転校生がいます！」早いな！ もうちょっと延ばそうよ！ 先生が叫んだ直後、ざわつきが最高潮に達した。

「え、男？ 女？」「さつき少し見たけど、男だつたよ」「マジか！」「女がよかつた」「うん」「分かる」「どうこうの意味よ」「何が言いたいのよ」お願いだから静まつて。

先生が「はいはい！」と言いながら手を叩くと、男子の声がピタリと止んだ。その行動にさらに女子が先生を睨みつけているのが容易に想像できる。……恐るべき、女子。

「さて、入つてきてもらいましょう、どうぞ～」

入つてもよろしいでしょうか。女子の顔を見たくないのですが。

ガラガラと扉を開き、歩みだす。教卓の前まで来たところで向き

直り、「凪岸隼です」と挨拶。先生が「仲良くしてあげてくださいね」とか言い出す。小学校じゃねえんだから。

「凪岸君の席は、中央列最後尾ね」

「了解です」見りやわかる。そこしか空いてないんだから。いつもして俺の物語は開かれたのであつた。……ふう。

「夙戸つてどこに住んでんの?」「……松戸の南東部あたりかな」「どこ出身?」「……生まれたのは日本じゃない」「え、外国?」「どこ?」「……イギリス・ウェールズ地方」「ウェールズつてどこだっけ?」「……えつと、グレートブリテンの南西部」「え、てことはハーフ?」「……うん」「英語上手い?」「……上手い?」つていうか、普通が分からない」「てことは上手いのか」「……いやだから」「髪なんで金髪? 染めてんの?」「……母親譲り」「日つき悪いのは?」「……田が悪いのと父親譲り」最後待って。お願ひだから。

朝のホームルームが終わって1時間田が始ままでの間、20近くの質問に答えた。正直疲れた。まさかここまで人気者になろうとは。

そもそもこの学校は基本として帰国子女制度はなかつたらしく、俺は特別待遇らしい。ここの中学生かつ教師経験を持つ父親のおかげなのだろうか。その割には父親の話は出なかつた。

授業内容は以前の英國の学校むじゅくとは言語の差はあるものの、学力の差はほとんど無かつた。それほどこの学校が優秀なところであると言えよう。丁度1時間田は担任逸水先生の英語。先程の会話を再現すると、

* · · · * · · · * · · · * · · · * · · · * · · · * · · · * · · ·

「……では次の英文を、次の人」

先生は天然度は既に常軌を逸している。次は俺・異国同士の親を

持つ、ハーフの俺。

わざわざ意見を言つのも面倒なので、椅子から立ち上がり、

” When you have eliminated the impossible, whatever remains, must be the truth.” he said.

と、熟した。しかしこの行動が誤っていたらしく、「あつ、畠中だつたのね、えつと

と、混乱して慌てふためく彼女がまた、可愛かつたりもする。

こんな感じだ。

2時限以降も数学、体育、化学と続いた。何故か俺が悉く指され、熟しはしていたのだが、不運が起きたのは、昼休みを開けた5時間目。古文だ。

「では嵐岸君、次をお願いします。『来る』の未然形です」と言つた古文担当の学年主任・古里先生は、ふるさと 虐めなのか天然なのかは知らないが、俺を指名した。当然外国育ちで、むけい 英国でも、英語の古文であるラテン語などは勉強しない。無論、日本語の古文なんぞわかる訳がない。

「ええと……」

必死に考えるが、分からぬ。なんだよ未然形つて、知るか。教科書をバサバサと捲つて情報を探るが、答えらしきものは出てこない。

「……分かりません」
そう答えるしかなかつた。

「おや、そうですか。では……この場合、『来る』の未然形は『来
れ』となります。」これは語幹である『来』が「
知るか。解るか。出来るか。この三拍子の内、何が狂わない限り
俺は古文を理解できそうにない。無論、6時限目にある漢文も同様。
以下同文。

高校生活初日が終わると、すぐに脱力感で体が虫食われる。疲れ
た……疲れ切った……

しかし、日本の女子というのはタフみたいだ。

当然、は？と思う。なんだカラオケって。……ああ、日本で流行ってる歌を歌つたり踊つたりする奴か。確か発祥も日本だつたよ

「いや、俺、洋曲しか歌えないし」

「だーい丈夫！ 洋曲もあるしつ！ ほら行こうよー。」

何故か俺も行くらしい。前振り語が途切れていなかつた。

昨日の夜、父親との電話を思い出して、断る。すると女子は「そ

「なんだ、しゃあ明日行こうねー！」と言って帰ってきてしまう。ホントにタフだな、日本女子は。笑顔で見送った後、俺は仕事に戻るとする。

「……おまけは聞き込みだな」

「「」の学校の歴史？ なんでそんなもんが知りたいんだ？」

1回だけ顔を見たことのある校長に尋ねてみた。

「えっと、ですね……「」、「」の学校に入学することあたって、ちょっと知りたいなって……」

「学生手帳を見ればいいじゃないか」

「ですよね。そう来ますよね。」

「……あー……そうですね。では、これって知っています？」

右にポケットに閉まってあつた写真を取り出し、見せる。

「こ……これは……」

校長の顔が青白くなつていく。

「この人の学ランの左カラーバリについているのは、「」の学校の校章エンブレムですね？」

校長は頷く。

「う、うむ。しかし、これを一体どこで……？」

「17年前、ここに帰国子女として迎えた人の葬儀の際に借りてきました」

「た、頼む。このことは誰にも……！」

「分かつています。俺は調べに来ただけです。昨日、直前にこの事件ケイは関わるなと言されました」

焦り、震えた声をいつたん落ち着かせる。落ち着け俺。

「しかし、俺は知らなければなりません。母の病死の原因を。そして俺がここで生きていけるかを」

「そ、それは……」

校長の目には、既に光はなかつた。

「お願いします。教えてください」

一呼吸置き、

「「」の写真の彼はなぜ、上半身が『狼』なのでしょう？」

「ぐ……」

校長の顔は既にグシャグシャになっていた。

「申し遅れました。私、こうこうものです」

俺は左内ポケットからある証明証を取り出す。そこに元はこう書かれている。

「CIA Calmy Hayato Riverbank」

校長室を出、父親にメールで経過報告を済ませる。校長は大丈夫だろ？ 明日自殺体で発見されるんじゃないだろ？

「風岸君！」

昇降口を出たところでさつき教室でカラオケに行かないかと俺を誘つた女子5人が俺を取り囮んだ。

「用事は終わった？」

「は？ あ、ああ……」

不意を突かれ、つい構えてしまつた。危ない。

「ほら、だから言つたじやん！ どうせ直ぐ来るつて」

「え？ な、何？」

もしかしてさつきの会話を聞かれてたんじゃないだろ？ いやでも一般人からしてみれば……

「校長室に入つていいくところ見たの。何の話をしてるかまではわからなかつたんだけど、何となくは分かつたよ

「え……？」

まさか、まさかまさか……！？

「『』の学校の14怪談！」

「……は？」

意味不明な上理解不能なことを言われ呆気にとられる。14怪談

……？ なんだそれ。

「ホントは14つじゃなくてもつと多いんだけどね」

「なんだそれ、なんで14なんだよ。」

「第3章2節、『かの地に来る忌まわしき者には災いと憎悪が根を張り心が妖へと出る』！ どういう意味が分かる〜〜？」

「全くもつてわからない。というか、それってなんだ？ 教典か何かか？」

「何それ？」

「『外国人がこの高校に来たら、人間じゃなくなる』！」って言う伝説なの」

え、マジ?
俺大丈夫?

冗談交じりで返しているつもり。しかし……これはいきなりあた
りか……？

建てたんだって」

墓地、
か。成程

待て押すな走るな腕引張るな！ 都会の女子怖い！ 俺潜入で
来ただけなのにここまでされなきや いけないのでしょうが、もう虚
しさしか残んねえよ！

結局その日は女子軍団に絡まれ、ろくに調査もできなかつた。
俺、^{エージント}諜報員なんんですけど。

翌日、昨晩女子に連れてられて一晩中野外を延々と歩き回ったのを早速後悔し、今日以降も誘われても絶対断ると心に誓つた。もうあんな悲劇は繰り返したくない！ 事件は現場で起きてるんだ！ これ以上上の意見なんて聞いていられるか！ ……何言つてんだ俺は、大丈夫か。

田の下に、もう完つ全にくつきりとついている隙は諦めて、家に帰つてきてから3時間後に登校するといつ最悪な事態となつてしまつた。自宅から15分の距離に高校への通勤手段は歩き。自転車だと5分で着くのだが、まだ事務に手続き書を提出していないのでそういうはいかない。バレたら問題児扱いされてしまつ。今日申請しよう。

高校は町の高台にあつて、そこへの道は全て上り坂。自転車だと結構つらいかもしだいが、気にしない方が身のためだろ？

「……つつつても、……なあ、……ちょっと、……ヤバい」

昨日から続いているこの疲労感は半端なく、幼少のころから施設にて鍛えられている俺でさえも、筋肉や内臓が悲鳴を上げる。……つーか、腹痛え。腹筋なんか内臓なんかわからぬ。誰か助けて。

「はー やと君つ！」

真後ろから聞きなれない、甘く甲高い声が耳を通つて頭にこだまする。

振り向くと、笑顔全開というか、その笑顔が周りの男子に伝染するほどの脅威となりそうな笑顔が、俺の顔の目の前にあつた。しかもその状態が数秒続いた拳句、膝が変に折れ曲がる。

「うわ、わ！」

振り向いた状態で進行方向に倒れたので、派手に転び右ひじを強打した。ゴツ！ という鈍い音が聞こえ、肘から肩へと痛みが伝わる。

「だ、大丈夫！？」

驚いた声がさらに頭を震撼させる。二半規管がイカれ、まともに立てそうもないが必死に踏ん張る。

「だ、大丈夫……つとお、おあ！？」

立ち上がろうとして一步前に出して踏みしめた右足がさらに滑る。その結果顔面までもコンクリの道路に強打。なんなんだ……

「…………お、おお」

非常に情けない声が漏れる。ヤバい、マジで死にたい……

「え、えーとお。ホントに、大丈夫」

「大丈夫……」

額を道路に付けた状態で答える。最早、人として情けなく思つた末だつた。

「クラスメイト?」

数分後。何とか自力で回復し立つて歩けるようになった。ここにだけ抜粋すると、下半身不随の重患者の奇跡の生還とも取れそうながらさらに俺を追いかむ。

「うん。隼君の前の席だよ」

昨日の女子軍団よりかは「マシな女子に初めて話した奇跡の体験」これは好印象になりそうだ。……あくまでも潜入捜査としての必須スキルだ。

記憶にならない上

事実、女子には興味がない。なぜなら、施設にいた頃寮母や施設の仲間に囲まれて育つた時、女子にそんな感情など芽生えなかつたからだ。そもそも寮母や女子を含めた仲間たちは同室や同環境で育つていたし、風呂なども共通だつた。生まれてから男女共通の環境で育つた俺たちに性的な恥じらいや秘密は存在しない。存在し得ない。

え

落ち込んでるところよつ、墜ち込んでいる。つまり、撃沈されておいる。アニメでよくある、『ずーん』という平仮名が実際に頭の上に載つているようだ。

突然彼女はジャンプし、俺に向き直る。その異様さに俺も立ち止

「私っ！ までしまつた瑞守彩菜！」

自己紹介されているのか、単に呼ばれているのかもわからない大

声。

「誕生日は11月11日の蠍座！」

「いやそこまで求めてない」

讀生田國之用之田の蠶座

一応突っ込みつつ、歩を進める。俺の脚に追いつくよつと早歩を
で駆け出す瑞守さん。

「聞いてよー！」

「求めてないって」

「聞いてつてー！」

「なんで」

「いいからー！」

煩い黙つてくれ。と、心でつぶやきつつ、「…………ド？」と聞き返
してしまひ。

「3サイズは上から83・58・80ー！」

胃酸が逆流しかけた、ところは嘘でもリアクションを取らなけ
れば不審に思われてしまひ。演技とは言えど、蒸せる。
「ぐあふー？」ダメだ、わざと蒸せると変な声になる。

「因みに」

「言わなくていいからー！」

昨日の女子団体と同じく、この疲労を感じさせる瑞守さん。いつ
たい何者……

それからというもの、腕時計を確認したところまだまだ時間があるというのにずっと喋っていたせいか、高校に着くころには予鈴10分前となっていた。その間、登校中は一方的で意味不明な自己紹介に的確な突っ込みを入れていた。それだけで疲労はピークを越え、悪化する一方。そして最終的には

「そだ、メアド交換しよう。」

と一般男子からしてみれば絶好的なシチュなのに對し、そんなもんどうだつて良いし、とにかく眠いし、いろいろと放り出したいと考えていた俺からしてみれば最悪のシチュだつた。一々携帯を操作して、赤外線のポートを合わせる。普段それぐらいの動作は簡単なものだが、この不眠時間2~4時間超えの今では結構難しい。

* * * * * *

結果から言って、この日の午前中は何もせずに終わった。教室に着き次第机で俯せになると、1分をせず内に夢の世界へと旅立ち、起きた時には腕時計の短針が13時を指していた。昼休みだ。丸々4時間半寝てしまい、絶望に暮れた。はあ……

「こら廻岸！」

起きて直ぐ、行き成りの罵声と同時に右頬が引っ張られる。

声ならぬ声が出て、恥ずかしくて堪らなくなる。

「何4時間目一杯寝てんだ！」転校生としてのプライドはないのか

「……そんなもの昨日1日で粉末状になるまで文字通り粉々に砕かれました……」

横目で、昨夜俺を散々連れまわした女子団体を見る。……目がぁ
つて直ぐに逸らされた。おいコラふざけんな。
しかしそんな悪あがきは通用せず、今度は頭の天辺に拳が突き刺
さる。

「学年主任に向かつて良くなき口が利けるな。ああ？ いいか、次俺の授業で寝てみろ？ そこベランダから突き落とすぞ！」

ちょっと待て、体罰宣言を通り越して殺人予告を突き付けてきや

「そして、ついでにコイツだ

俺の目の前に厚さ5cmはあるだろ？、書類をドサッと積み上げる。
……え？

かつたな？」

「…………一応聞きますが、これ何枚?」

「300枚」

即答された。しかも内容を見てみると、化学の穴埋め形式の文章題が1枚1枚万遍なく印刷されている。

「全部だぞ？」当たり前だからな」

そういうと、学年主任兼1年化学担当の色沼先生は教室の窓際後ろのドアから出て行って、バンッと音を放つて閉めた。

後に取り残された俺は、クラスメイトの哀れみと同情の視線の嵐の中に一人で佇んでいた。……椅子に座ってるけど。

「ホントにバカだね」

下校時、登校路が同じところと下校路も同じだということを再確認した俺と瑞守さんが校門出て直ぐの坂道を下っていた。

「なんなんだあのものぐさ野郎……」

怒鳴と苦惱に頭が逆上せ、今にも倒れてしまいそうになる。危ねえ。

「ふざけんな。死ね。土に還れ。消えろ」

その他思いつく限りの悪口を並べてみたが、この気持ちは變化はない。妥当といえば妥当だ。

「そんなこと言つてたつて、課題の枚数が減る訳じゃないでしょー」

「？」

瑞守さんがもつともなことを言ひ。

「ンなこと言つたつて、ありえないだろ。……」

「ことあつた？」

「や、ないよ。でも色沼先生言つてたよ、『一度でも遅刻、欠席したら単位没収。携帯操作や昼寝などは減点1。私語と課題未提出は減点2。文句のある奴は来い。一対一張りつてやる』って『つまり課題やつてこないと、減点合計3になる訳か……』やつやいしんだけじね、やりやあ。……え、ちよつとまて、減点？」

「どうするの？」

瑞守さんが尋ねてくる。

「どうするつて？」

「だから、物理的に無理でしょ、明日までになんて」歩くと同時に茶髪のポニー テールの先端が跳ねる。

「何がい痛い訳？」

「あーもー、わかんないかなあ」

いやわかるけどね。言わせたいだけだ。

「私も手伝つてあげるつて言つてんの」

朝見た笑顔より若干卑屈そうな笑みが広がる。

「もちろん私だけじゃないよ」

「……は？」

その瞬間、真後ろから物凄い速さで俺たちを追いかけてくる奴らが姿を現す。

「う俺たちもいるぜえ ！！」 「私たちも ！」

恐らくクラスメイトであろう（覚えていない）男女計8人が、叫ぶと同時に俺を蹴り飛ばす。ぐは。

「10人いれば、300枚なんて1人30枚でしょ？ すぐ終わっちゃうよ」

道路でぶつ倒れている俺を引き揚げ、肩を組ませてくる男子。それを見て笑い合っている女子。

そのとき、俺は初めて悟った。

「いづら、まさか……」

それでも、考えないことにした。もしそうだとしたら、俺はここにいられない気がしたから。知つてしまつたらもう戻れない。帰つてこれない。諜報員トランジエントとしては失格かもしないけど、俺はこの道を選ぶ。それが、『俺が俺である理由』だから。

私の声が聞こえますか？

私はここにいるよ。

だから皆私に声をかけて。

お願い。

このまま消えていくのは嫌だ。

自由になりたい。

でもなれない。

なにかが、私を縛つてる。

それは夢。

それは願い。

それは記憶。

それは人。

そんな幻像が破れたら、
きっと自由になれるかな。
その可能性に掛けて願う。

いつか、自由になりますように。
いつか、解き放たれますように。

『解』は私を束縛し、

『謎』は私を暴き出す。

そして、私が来るのは
『イ・ミ・タ・イ・リ・ス・ン』
『私が私である理由』。

いくら10人といえど、300枚の文章題問題を割り振ったところで、1人につき30枚解くことになる。その内1枚にかかる時間は約10分。単純計算で5時間かかる。もしこの300枚を1人でやろうとしていたら、50時間かかることになる。今日の午後1時に渡されたこれを、明日の午前9時40分までに終わらせることは物理的に考えて不可能であった。つか、あの教師は本当にこれをやつてこさせるつもりだったのか……、理解に苦しむ。

あれから時間が経過して、午後10時。5時に俺の家に着き次第、皆が集中してやつてくれたおかげで終わらせることが出来た。そしてその内4人は疲れ果てて寝てしまっている。

「……はあ」

溜息が零れる。俺も横になりたいところだが、生憎スペースがない。一軒家で、しかもそこそこの大きさの家だが、俺の部屋は10畳程。机やタンスなどの家具もあるため、10人全員が寝転べるほど広くはない。

「あ、隼君」

疲れ切つて、体育座りになつて硬直している体を動かす。ヤバい、首が攣りそう。

「……うん?」

声すらまともに出せない。

「そろそろ、私たち帰らなきゃ」

そう言つ瑞守さんにつられて「あ、俺も……」「私もそろそろ……」

……」「やべえ、俺門限8時だつた」「私の家は門限ないから……」等と言いながら立ち上がる。俺も立ち上がり、

「……今日は悪かったな、こんなに遅くまで付き合わせちまつて」と詫びを言つ。

「良いつて良いつて」

「困ったときはお互い様だよ」

「今度英語教えてな」

「それじゃ私も」

まだまだ元気、と言つてるかのようにふるまつてゐるが、顔を見れば疲労がピークを越えているのがわかる。

部屋を出、廊下を大勢で歩く。時々ミニシと音が鳴るが気にならない。
そこまで古くはないはずだ。

瑞々さんを先頭に一列に

常にテンションの高いクラスメイトが一人、また一人と帰る。やがて、一人玄関で佇んでいた俺は、己の無力を痛感しその憤りを拳に乗せて壁を殴つた。

「よへやつた、ほめてやう」

翌日の3時間目、授業の前に昨日出されたプリントを突き出した。しかし帰ってきた言葉はそれっぽっちで、それだけかよと心の中で突っ込みつつ、色沼先生の評価が思つた以上に悪くなかったので安心した。

「で、誰が手伝つたんだ？」

……やつぱりな。どうせそうだらうと思つた。それでなきや、今
レーデプリントが出せるわけがない。

「男子が鮎川さん、石田さん、津蠶さん、木下さんで、女子が瑞守さん、井上さん、咲凪さん、田口さん、草御さんです」

言葉をつづると同時に、各教員に配布される出席簿に記入していく

く。評価の清算でもしているのだろうか。

「……OK。よし、それじゃあ授業だ。席に着くよ！」

教卓に背を向け自分の席に戻る前に、俺の視界の中に親指を立てた拳が9つ現れる。本当にありがとうございました。

自分の席について、教科書とノートを開く。

さて、前回少し話した熱力学第一の法則だが……」

しかしながら、今思ふと、昨日の課題は俺のためのものではないのだろうか。

……真偽を解くのは、面倒だが。

「さすが」

放課後。帰ろうと教室を出た直後、その違和感が俺を襲つた。廊下の窓に映る、校舎の外の一本しか花を咲かせていない桜。もう桜は遅れているはずなのに、一本だけ満開に咲かせている。そして、その傍。何かがいる。……俺に靈感は皆無であると思いたいのだが、確実にいる。肉眼ではその脚は確認できず、やはり着ている服はこの学校の昔の制服だ。

「まいっただな……」

調査員として上からの情報は下りてきているが、せいぜい『パワースポットとしての力が確認されている』とだけだ。『実際にそこにいる』とか『呼び寄せることが出来る』とまでは聞かされていない。事実、こういう時の対処法を聞かされていないからだ。何を、どうすればいいのかわからない。ほつと/or いいのかも知れないし、排除しなければならない。

「仕方ないな……」

胸の裏ポケットから携帯電話を取り出す。電話帳から父親の電話番号を検索し、ホールする。3ホールの末、繋がった。

「私だ」

父親は俺の上司でもある。現場の対応が不可能な時は、上司に従う義務があるからな。このどすの利いた声は、何時聞いても聞きなれない。

「あ、俺」

「どうした。転校したくなつたか。待つてろ直ぐ手配する」

「違う！ 仕事の話だよ！」

「それならそうと先に言え」

「言つ前に早合点したのはビビの誰だ！？」

「耳元で五月蠅く鳴くな。耳鳴りがする」

「じゃあ何で電話に出た！？ つてそういうことはどうでもいいんだよ！」

「コントに付き合つていられる状況じゃない。

「……今さ、学校に靈がいるんだよ……」

「排除しろ、と言いたいところだが2、3点確認したい

「な、なんだ？」

「第一に、それは人間の靈か？」

「あ、ああ。見た目はそつっぽい」

「脚はあるか？」

「見たところは無い。足がある靈もいるのか？」

「いや、その場合は人間に化けた妖怪の可能性が高い。脚の存在が曖昧であるなら、人間の靈であることにはまず間違いない」

「どうか」

「第一に、日本は今、日暮れか？」^{そつち}

「いや、そつまではいかないけど十分に日は傾いてる」

「どうか。第二に、その靈は日陰にいるか？」

「ああ。一度、一日中日陰になる場所だな」

「質問は以上だ。総合的に考えて、その靈はお前に倒せるレベルと

確認した。健闘を祈る

切られた。あっさりとしてやがる。

「……ホントかよ」

そのまま帰る訳にもいがず、やはり中庭に直行。花全開の桜の木。今は五月の初めなのに…… そしてその傍にいる一人の少女。下を向いたまま動こうとはせず、棒立ち（脚は無いが）している。

「えっと……」

話しかけようとして、詰まる。周りに一般人がいる。もしこんなところで話しかければ、一般人からは完全に不審者扱いされるだろう。なんで桜の木に話しかけてんだ？、と。そして一方この彼女からしてみれば、自分見えないはずの一般人が話しかけてくるなんて思つてもいいだろう。ドン詰まりだ。

「…………」

しかたないので、散っている桜の花を掴む素振りで彼女の手首を掴み、一目散に人目が無い日陰へと突っ走る。これだけでも不審者な気がするが…… しうがない。

驚いた様子の彼女は、目を極限まで開いたように俺を見つめる。止めてくれ。めっちゃ怖い。

「…………う…………」

彼女が何か言っているが、聞こえない。てか聞きたくない。怖いから。

第一校舎裏の日陰。左にはプール、右には体育倉庫となつていて、こんなところに来る生徒はまずい。

「で、なんでこんなところにいるんだ？」

ホントは話し合いなんてしたくないのだが、しうがなく語りかける。

「あなたは……私が、見えるの？」

暗く、もう顔を見たくない。外見は普通の人間だが、オーラが常人離れしている。

「あ、ああ、見える。お前がなんでここにいるのかは知らないが、

「にいちや黙田だ。わかるか？」

「……………わからぬ」

どうにもならない。

「……あのな、ここは学校だ。教育の現場だ。幽霊がここにいらっしゃるだ

そういう、父親は倒せとか言つていたが、なぜだ？

……あなたも図じりを語りのね

何
?

私の父と

「何たって？」

意味が分かぬないとJINが理解不能……前にも言った筈がす

「…………あいだへがむかひます。もし必勝なら、相

談にも乗るから」

実際に相談になるかは別として

相談なんて必要なし

ま それが一番あいがたしんだにとなん

はおとため息を一ぐ

……今はそれどころじゃない

卷之三

「アーティストの心」

「」

ノイリヤ
好バ

そのとき、彼女が持っていたものの正体が分からなかつたのが、俺の敗因だろう。

放課後になつてすぐ、隼君は教室から飛び出して行つてしまつた。監視対象に逃げられてしまつのは、監察官としてあるまじき失態……どうしようもない。

「ふう……」

いつもの監察時間帯は午後十時までだけど、今日ぐらい……いや、そういう心構えが任務を失敗へと動かすことがある。気を緩めてはいけない。

教室を出、隼君の後を追いかける。階段を駆け下りて、昇降口を裏から周り中庭に出る。事務棟裏の一本だけ花を咲かせた桜の木に彼はいた。……なんか、どう考えても不可解な行為である。いや、彼が。いきなり腕を振りかぶり、何かを掴む。桜の花？ そして直ぐに人気のないところへと走つて行つてしまつた。……何してんの？ 不審こそあつたが、彼を監視している私もそれなりに不審なので善処する。

「……なにやつてんだろ、私

「Jの任務前……まだ本部にいたころ、私は入……隊？ 一ヶ月目の新米だつた。なのに、普段の行いがよかつたのか、部長に任務を任せられてしまつた。上司の任務に勝手に付いて行つて、それなりの能力と覚悟をもつてこの任務に就いたつもりだつたけど、まだ無謀だつたのかなあ……、つて！ そんなマイナーな気分でどうすんの私！ こんななんじやダメ！ 左右の頬を引っ叩いて気合を入れ直す。……痛い、すごい痛い……

『P_i P_i P_i P_i P_i P_i』

電話のホールが私を現実へと連れ戻した。

「はい、こちら雛神」

あえて、今の名前を言わない。

「おい……、折角証人保護プログラムを受けているんだから、今の名前で受けたらどうかね……」

「申し訳ありません部長。しかし、この苗字は私自身を縛りつける

ための戒めとして、心に鍵をかけていますので」

「心に鍵を掛けたら、コミュニケーション能力に欠点が生まれる気もするが？」

「その点では問題ありません。クラスメイトや担任にもバレていません。今のところ、このことは校長しか知り得ませんので」

「そうだったな……いや、うん。君が問題ないと言つならそれでも良い。でももし不安や要望があれば何でも言つてくれ。君の過去は誰のものでもない。君だけのものだ。この任務やここだつて、私が強制したわけでもないし、君が希望したことだ。君が望んだ通りに全て受け入れる」

「……ありがとうございます」

「うむ。では、幸運を祈る」

「はい。お疲れ様です」

電話を切る。

このまま、誰にも悟られずに生きていけるのが一番良い。私は、それを一番望む。ふう、と再度溜息。溜息は幸せの逃すとかいうけど、迷信……つていうか、嘘だよね。そう思いたい。

ふと、監視対象に視線を戻すと、彼は蹲っていた。その瞬間、私は走り出しちゃった。なぜなら。

今まで見えていなかつたものが見えてしまったから。

白く輝く一陣の閃光。その美学は誰をも魅了し、魅入らせることが出来る。しかしそれは作品の中だけだ。現実に起きれば、それは凶器と化し、血を流らせる。

「く……」

油断したのがまずかった。父親が『倒せ』といった意味がやつと分かった。一筋縄ではないかない。当たり前だ。いくら人間の形をしていたも、既にこの世には関われない環境だ。誰とも、何とも。左肩……かろうじで動かせる。神経は切られていないようだ。しかし皮膚は裂け、深紅の液体が流れてくる。

「終わりだ」

その声とともに、再び閃光が響いた。今度は頭の真上から、垂直に狙っている。まずい、この体制で受けたら確実に刺さる。でもこの状態じゃ避けることもできない。裂かれた物理的な痛みと碎かれた精神的な痛みが俺を蝕む。今ここで、俺は負ける。

しかし「ギイイイイ」 という金属音が聞こえ、俺の前に誰かが立つ。……誰だ？ おれを、助ける？ この靈が見えるのか？

「逃げろ！ 早く！」

聞き覚えのある声が俺の緊縛を解く。

「……？ だれだ貴様。私が見えるのか？」

靈までもが驚嘆を奏でる。

「そんなことなんだつていいでしょ。それより、ここで成仏しなさい」

靈の閃光とは違う、風を切る音を耳が捉える。

「貴、貴様……」

靈の深く思い声が驚きを物語る。

「ほり、何してるの？ 掛かってきなさいよ……」

よつやく動けるほどになつてきた足を無理矢理動かし、戦闘に飛

び入りする。

「ちょっとー？ 怪我してるんだから逃げるか休んどきなさいよー。」

「つるせえ！ 俺の問題だ！ 俺が片づける！」

肘打ちで靈の脇腹を打つ。それと同時に助けてくれた女が靈の鳩尾に踵で一撃をかます。

「ぐおう…………！」

呻く靈が地面に倒れて地鳴りが襲つ。

「貴様らあ…………！」

その雄叫びと共に姿が変化する。元の姿の数倍にも膨れ上がり、制服を着ていたはずの靈の体は凹凸へんぱと毛が目立つ獣へと化け、妖怪と言えるべき醜態を漂わせる。両脇からは第三、四の腕が生え、顔は既に異様である。

「…………貴様ら、生きて帰れると思つなー。」

最早さつきまで女子高生だつたはずの相手に何があつたと思いかねない心境だ。その声は低く、高い。様々な声調の声が同時に再生されたよつた、恐竜を思わせる声。既に化け物だ。体長は優に6mを超えるだらう。

「畜生…………」

「隼！ 受け取れ！」

女の声に反応し、その方角を見る。すると刃渡り30cmはあるうナイフが飛んできた。そしてそれを受け取る。

「サンキュー！」

順手で受け取ったナイフを逆手に持ち帰る。やはりこの方がしつくつくる。そして同時に、走る。

「俺に勝てると思うのかー！」

化け物の右前腕が俺に向かって伸びる。それを合氣道の要領で躱し、手首にナイフを刺す。

「ぐうおー？」

してさうに肘の方へと腕を裂いていく。

「らああ…………！」

肘の骨（あるのかどうかは知らんが）まで到達するとナイフを引き抜き、化け物の足の甲、膝、右後肩を踏み台にして背中に回る。

「ちょこまかと！」

化け物が胴を振るのに合わせて、俺までも揺らされる。しかし……

「そつちばつか構つてんじやないよ！」

女が構えていたナイフを化け物の左耳に掛けて放つ。しかし外れ、頬を掠つた。

「ちゃんと狙えよ……！」

「くあつ……！」

掠つただけだが化け物は微かに怯み、上半身を支えるのに苦しているようだ。

「煩いわね！ 当てればいいんでしょうー？」

女は制服の背から新たなナイフを出し、両手に構える。

「はっ！」

叫びと同時にナイフが放たれる。今度は二連。確実性が向上された。

「貴様うりごときにこの俺が……！」

咆哮と同時にナイフが両眼に刺さる。……見た目は物凄いシユール。両眼が潰れた醜い化け物が踊っている。その踊りにつれて、背中で張り付いている俺はもがく。

「ほらつ……！ 落ち着け……！」

「黙れっつ……！」

足を首に絡ませ、頭に乗っかる。これだけでも本来なら頸椎骨折で一撃必殺だ。化け物でなければ。

「離れろつ！」

首を振り、必死に俺を引き剥がそうとする。しかし俺は腕でしつかりとしがみ付き、何とか引き剥がされないようにする。俺もナイフを構えているのだが、このせいで何もできない。

「誰が離れるかっつ！」

その中で、女は制服の両袖から新たなナイフを引き出し、構える。

いつたい何本持つてるんだ。

「私だつて、負けられない！」

対抗意識を持つよりもこいつをどうにかしろよ！ なんで俺だけが必死に肉弾戦に参加してんだよ！ てめえさつきからナイフ投げてばっかじやねえか！ と色々と言いたいことがあるが叫ばない。仲間割れは御免だ。それが原因で敗北なんて、愚労極まりない。

一瞬動きが止まつた化け物に、逆手に構えたナイフを頭へと振り下ろす。

「な……！？」

悲鳴ともどれる化け物の声は完全に無視する。ひたすらナイフを振り下ろす。それだけに集中する。

「これで……っ！ 最期……っ！」

女が化け物へと走り、足の甲を踏み台にジャンプする。そしてその一瞬で喉の左右に突き刺したナイフを交差させた。巨体が地面にひれ伏し、地鳴りを奏でる。憎しみと憐みの連鎖が断ち切られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9856w/>

Silent voice -声なき声-

2011年10月10日03時12分発行